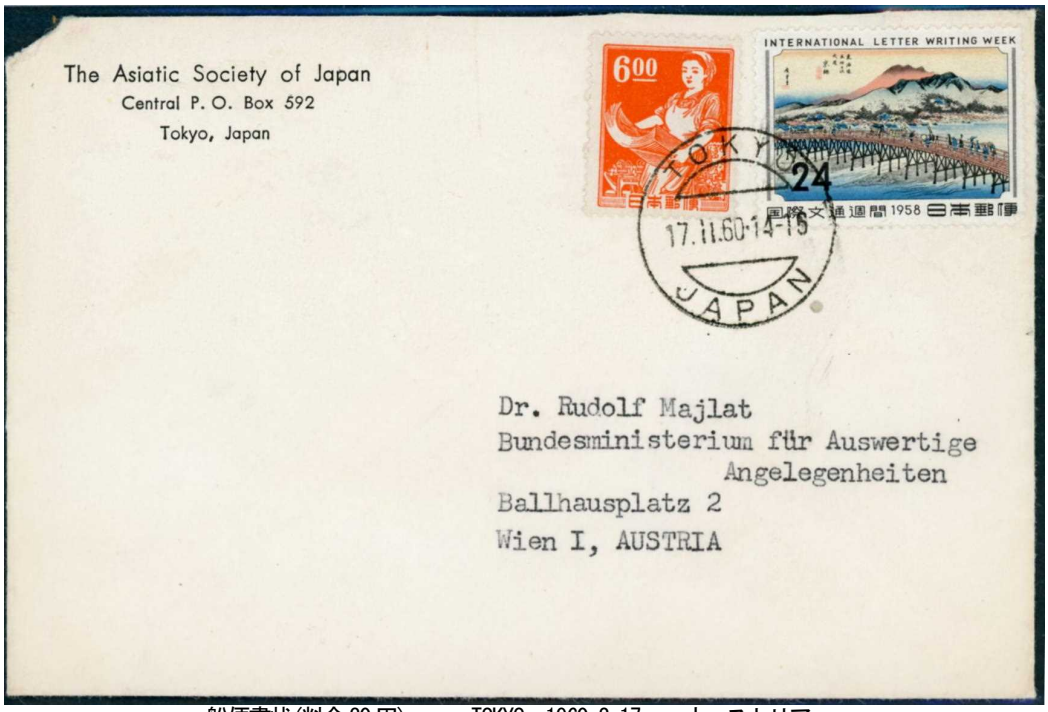
文通週間「京師」の料金改訂後使用

永吉 秀夫



船便書状（料金30円）　　TOKYO　1960.2.17 → オーストリア

1958年に発行が始まった文通週間切手ですが、1975年までは海外あて船便書状基本料金の額面で発行されました。料金改訂にともない24円→30円→40円→50円と変遷しましたが、その中で最初の1958年「京師」だけが、24円という半端な額面での発行となりました。

使用例収集ではもちろん1枚貼り船便書状が基本となるのですが、半端な額面が災いして、それ以外に気の利いた使用例はなかなか見つかりません。国内3倍重量第5種便に1枚貼りで使用されたカバーが現れたら高値がつきそうですが、200g超となるそのようなカバーは、リーフに貼るのに苦労する大型封筒となりそうです。

混貼使用でも、気の利いたものはなかなか思いつきません。5枚貼りで額面の端数を解消した120円とし、高額料金となる各種郵便に使用したものが考えられますが、なかなかお目にかかれません。筆者のアルバムには、国内便として上記のように 120 円料金とした現金書留便と雑多な混貼で 35 円料金とした速達書状、国際便として料金過納の3枚貼り航空便書状（料金70円のところ72円貼り）を貼り、何とか形をつくってきました。

紹介品は、1959年4月の料金改訂により30円料金となった船便書状に、差額用6円普通切手とともに貼って使用したカバーです。差し出しはAsiatic Society of Japan、なんとなく文通週間切手を業務用として買いおきしていそうなところです。差額として貼られているのは産業図案の6円切手です。1951年10月の料金改訂で主用途を失った普通切手ですが、局によってはかなり長い間窓口で販売されていたようです。かなり自然なルックスのカバーとなりました。筆者のアルバムに貼られている3枚貼り料金過納便を、これで置き換えようと思っています